
愛憎の彼方で笑う

HIRO.T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛憎の彼方で笑う

【Nコード】

N5522E

【作者名】

H I R O ・ T

【あらすじ】

人の道を外れてゆく父王。それを正そうとするが聞き入れられず…。。

「申し開きはあるか」

落ち込んだ眼孔の中から鋭い視線で引き出された青年を見据えた。後ろ手に縄を打たれ、屈強の兵士に囲まれた青年は青ざめ震えているかと思えば、睨み返すように視線を上げ、

「どうぞ目をお醒まし下さい、陛下」

立ち上る怒りが見えるようだった。

鞘に守られた剣で青年を打ち据える。

周囲の者は身を縮ませて息を殺しその光景から目を背けた。

「儂が寝言を言っていると言つか！」

「……いいえ。いいえ…陛下…」

打たれて床に突つ伏す青年を見据え、鞘の先で床を叩く。

それは悪魔の足音に似て、室内の者の鼓動を早くさせた。

片隅の少女が悲鳴を上げそうになり、あわてて傍らの女が少女の口を手で塞いだ。

じろり、と睨み付けると少女は身を強張らせて声が漏らせなくなった。

ゆっくり鞘から剣を抜く。

差し込む夕陽が刃を真っ赤に染めれば、血に濡れる予兆のようだ。「では、どうということか、説明するがいい」

切っ先を青年の顎先に当て、笑みを浮かべて言い放つ。

「あの魔導士を城から退去させて頂きますよう。あの男の言葉は甘い。ですが人の道を外れております」

「何を言うか！」

振り上げられ、下ろされた剣は青年の頬をわずかに裂いた。

滲み出てくる血に、片隅にいた少女はとうとう気を失ってしまった。

「あれは儂の大切な助言者。あれの言葉に従い戦をし、その全てに

勝った。あれがこの城に来てから負け戦はない。それは喜ばしいことであろう」

「確かに。確かにそうです。が、戦の跡は？ 死臭が満ち悪鬼が蔓延り、山の木々は枯れ、野の草花も枯れ、泉は干上がり、川は水を失い、人の住める地ではなくなってしまうました。それはあの魔導士の妙な力が……」

「ではお前は戦に敗れて隷国に成り下がれと言うのか？」

「いえ……」

ゆっくり、焦らすように背後に回った王が剣を構えた。

「へ…陛下！ 殿下をいかなさいますっ！？」

控えていた重臣の一人が叫びながら進み出てきた。

「国、民を思わぬ者が王位を継いでよいのか？」

「……陛下」

「それにこやつはもとは第三王子。上の二人と同じ病に罹ったと見える」

「……病…ですか？」

「臆病風にやられたのだ。こやつが王になれば国は滅びる」

しかし、と言いかけて王に忠誠を捧げてきた壮年の男は、他の重臣たちを見やった。

誰もが苦悶の表情をしている。

臆病風の方がまだしもだった。

今やこの国は隣国から魔国と呼ばれている。

たった一人の王の関心を得た魔導士によつて。

二人の王子も父王に進言したが聞き入れられず、反逆の意ありと処刑されてしまった。

残る王族はこの第三王子とまだ幼い一人の姫のみ。

「国を守るが故」

王の剣が振り上げられる。

これが最後のチャンスだと自らに言い聞かせ、壮年の男は王に体当たりした。

その意思は他の重臣たちに伝わった。

第三王子に駆け寄り縄を切る。

立ち上がらせ剣を手渡した。

「面白い。国の父たる儂に逆らうと言うか！」

白髪を逆立てるような激しい語気で言い放つと、空気がビリビリと震え、長年王に仕えてきた者は雷に打たれたように動けなくなつた。

「クエイル！」

王が魔導士の名を呼んだ。

と、前触れなく黒いフード付きのマントを身に纏った男がその場に現れた。

「お呼びで御座いますか」

「裏切りだ。こやつら全員、儂と国を裏切っておる。相応の報いを」
「畏まりました」

フードの奥の皺に囲まれた口が笑みをかたどった。

干涸らびた手が掲げられる。

王子は剣を握り直して躍りかかるが、目に見えない壁に遮られて斬りつけることが出来ない。

「くそっ！」

怒気を吐き出して魔導士を睨み付ける。

「民を裏切るとは罪深き事。それが王族であればなおのこと」

囁れているが、はっきりした口調で王子に向かって言い捨てる。

顔の前に開かれた魔導士の手が迫る。

逃げようとするが足が床に吸い付いてしまったようで動けず、手にした剣も鉛のように重く振り上げられない。

王子の絶叫が響く。

それはそのまま断末魔の叫びになるかと思われた。

だが次の瞬間苦痛の呻きを漏らしたのは魔導士の方だった。

「……王妃……様……」

手にした短剣が魔導士の背中に深々と突き立てられていた。

「国と、民を裏切っているのはお前と、そしてあなたです」
魔導士から引き抜いた剣で国王の胸を貫く。

その瞬間、呪縛が解けたが、重臣たちは動けなかった。
声をあげ自らを鼓舞して王子は剣を振るい、魔導士に断末魔の声をあげさせた。

そして剣が王に向かった時、重臣の一人が王子を止めた。

「御手を穢してはなりません」

口から血を流し今にも意識を失いそうな父を足元に、王子は奥歯を噛みしめた。

「御身は王になる大切な身体。あえて汚名を纏う必要はございません。お手柄は王妃様にお譲り下さいますよう」

最愛の息子、第一王子を失ってからずっと機会を狙っていた王妃だったが、今は放心状態だった。

「……母……上」

呪いの言葉を吐き出そうとして出来なかった王の唇が止まり、身体から力が抜け落ちた。

国王の絶命を確認すると、王妃は口元に笑みを浮かべた。

「……ようやく……この時が……」

囁くような笑いから高らかな笑いへと変わってゆく。

「……母上をお部屋へ」

狂ったように笑う母を見ていられず、王子はそう命じた。

「これで今度は私の思い通りに」

王妃の呟きは、誰の耳にも届かなかった。

(後書き)

UW様(http://pokopkopen.ikaduchi.com/)のお題『堕天したあなたへ5のお題』の四つ目です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5522e/>

愛憎の彼方で笑う

2010年10月8日15時57分発行